

「男、突っ走る！」

第60回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (21)

名古屋芸術専門学校3年生

木内 孝志 (50)

雅也の父

福沢 瑞枝 (21)

名古屋芸術専門学校3年生

1 木内家・雅也の部屋

N 「専門学校の卒業式が終わって間もなく、僕は四月の個人事業開始に向けて、部屋の模様替えと大掃除をしていました。卒業式直前には、地元の税務署に開業届と青色申告の手続きを済ませ、四月一日に個人事業を開始するという公表を済ませるのみとなりました。そして、あつぼんや京都へ、加藤となつ姐さん、明美ちゃんは東京へ、ぐっちは千葉へ、それぞれ卒業式が終わってすぐに旅立っていきました」

雅也が掃除をしたり、棚の配置換えなどをしている——真保が入ってくる。

真保 「うわ、随分散らかつてるわね」

雅也 「模様替えしようと思うとき、何から手つけて良いか分かんないね。さっきから、A地点にあったものがB地点にあったものの繰り返しで、全然片付いていない」

真保 「絶対にいらなくてもものは、潔く捨てっちゃったら？」

雅也「まあね。でもさ、何かに使うかもしれないって、どうしても捨てられなくて」

真保「それがいけないのよ。思い切って処分しないと、モノにあふれてたら、あんただって集中して仕事できないでしょ。いくら自分の部屋とはいえ、四月からはここがあなたの職場になるんだから」

雅也「はいはい」

真保「買い物行ってくるけど、何か買ってくるものある？」

雅也「うーん、多分大丈夫」

真保「じゃあ、行ってきます」

雅也「行ってらっしゃい」

出ていく真保——掃除を続ける雅也。

そこへ、雅也のスマホに通知が来る。

雅也、気づいてスマホを見る——瑞枝からのLINEである。

瑞枝の声「うっちー、突然ごめんね。『とんちゃん』に行く日、明日でも大丈夫？ 事務所準備で忙しいと思うから、もし無理な

ら断つてくれても大丈夫です」

雅也、一瞬ためらうも、すぐ返信する。

雅也の声「大丈夫。明日、行けるよ」

と、瑞枝から返信が来る。

瑞枝の声「ありがとう。明日、七時に改札前

集合で良いかな？」

雅也、『OK』のスタンプで返信をす
る——陰しい顔の雅也。

2 最寄駅・表（夕）

真保の運転する車が停まる——紙袋を
持った雅也が助手席から出てくる。

真保「帰り何時になるか分かんないなら、父
さんに連絡しときなさいよ」

雅也「はいはい。じゃあ、行ってきます」

3 駅・改札前（夜）

瑞枝が待っている——改札から出てく
る雅也。

雅也「お待たせ」

瑞枝「私も今ちょうど来たところ。ごめんね、

急に連絡して」

雅也「全然。多分、そろそろ『とんちゃん』
に行くタイミングかなって思ってたから」

瑞枝「そっか」

雅也「さて、最後の『とんちゃん』、行きま
すか」

瑞枝「うん」

4 居酒屋『とんちゃん』・（夜）

雅也と瑞枝が入ってくる。

雅也「こんばんは」

瑞枝「こんばんは」

串を焼いている大将と接客をしている

若女将が迎える。

大将「いらっしやいッ！」

若女将「あら、いらっしやい。カウンターど

うぞ」

と、カウンター席に座る雅也と瑞枝。

雅也「今日は、みずちゃんの送別会なんです」

若女将「送別会？」

瑞枝「私、四月から東京に行くんです」

若女将「いやだ、寂しくなるわね」

雅也「なので、せめて東京に行くまでに、もう一回『とんちゃん』行こうって話になって」

若女将「それはどうも」

× × ×

ジョッキのビールで乾杯する雅也と瑞枝。

雅也・瑞枝「かんぱーい（と飲み始める）」

瑞枝「模様替えは、順調？」

雅也「それがさ、なかなか片付かないの。AにあつたものがBに移ってるだけで」

瑞枝「そっか」

雅也「みずちゃんは、引っ越しどう？」

瑞枝「うん、ほとんどの荷物はもう段ボールに詰めて、後は引っ越し業者の人が運ぶま
でになった。だから部屋もすっきりして、
最低限の荷物と着替えぐらいしかないの」

雅也「いよいよか」

瑞枝「引っ越し準備の時に、いろいろ荷物整理してたら、こんなの出てきたんだよ」

と、鞆からファイルを取り出す——雅也が作ったアメリカ研修のアルバムである。

雅也「これ……」

瑞枝「懐かしいでしょ。うちーが作ってくれた、アメリカ研修のアルバム。楽しかったよね」

雅也「（目に涙を浮かばせて）……」

瑞枝「うちーとの思い出って、つきないよね」

雅也「……」

瑞枝「そうだ、もっと大事なもの渡さなきゃ（と鞆から手紙を出す）」

雅也「みずちゃん……」

瑞枝「帰ったら、読んで」

雅也「（涙をごまかしながら）あ、そうだった。俺もね、みずちゃんに渡したいものが

あつて（と紙袋を渡す）

瑞枝「何これ？」

雅也「うちの父親がね、みずちゃんに渡してくれって」

瑞枝「お父さんが？」

雅也「うん。この間、みずちゃんが東京に行くつて話をしたらね……」

5 木内家・居間（回想）

孝志が、雅也の前に梅酒の一升瓶の箱を見せる。

雅也「これ、梅酒の一升瓶？」

孝志「ああ。みずちゃん、東京に行くんだ。これ、餞別として渡してくれ。美味いんだよ、この梅酒」

雅也「分かった」

6 居酒屋『とんちゃん』・店（回想戻り）

瑞枝「そう……」

雅也「一回、みずちゃんとうちの父親と三人

で帰ったことあったでしょ。元々、『とんちゃん』と一緒に行ってると子だって話してたこともあって、みずちゃんが気に入っちゃったみたいだね。餞別として渡すように言われて」

瑞枝「申し訳ないわ」

雅也「せっかくだから、受け取って」

瑞枝「うん」

雅也「それにさ、俺だってちゃんとみずちゃんに手紙書いてきたんだから」

と、鞆から手紙を取り出すと、テーブルに置く。

瑞枝「うっちー……」

雅也「他のみんなには、卒業式の時に渡したの。けど、みずちゃんは、多分卒業式終わって東京に行くまでに、『とんちゃん』に行くために会えるんじゃないかと思って、卒業式の日には渡さなかったの」

瑞枝「そうだったんだ」

雅也「後で読んで。多分、今読まれると、俺

が耐えられない」

瑞枝「……」

雅也「……」

×

×

×

上串を運んでくる若女将。

若女将「はい、上串。私からのお餞別よ」

雅也「すみません」

瑞枝「ありがとうございます」

若女将「こっちに帰ってきたら、また寄って

ね。待ってるから」

瑞枝「はい」

雅也「……」

7 同・表ノ駅

雅也と瑞枝が出てくる

雅也「ごちそうさまでした」

瑞枝「ごちそうさまでした」

と、見送る大将と若女将の声が聞こえる。

若女将の声「ありがとうございました」

大将の声「ありがとうございました！」

線路沿いを駅に向かって歩いていく雅

也と瑞枝。

雅也「これで最後になっちゃったね」

瑞枝「うん……」

雅也「東京でも頑張ってたね」

瑞枝「うっちーもね」

雅也「……あのさ、みずちゃん」

瑞枝「何？」

雅也「東京に行く前だしさ……別に酔ってるわけじゃなくて、今から話すことは、すごく真剣なことなんだけど……」

瑞枝「……？」

雅也「俺……みずちゃんのこと、好きだった」

瑞枝「え……」

雅也「いつからか、分かんない。でも、去年の春、みずちゃんがイラスト専攻の梶川と付き合ってるって話を聞かされた時、俺、驚きよりも、ショックのほうが大きかったの。その時、気づいたんだよ。俺は、みず

ちゃんのが好きなんだなって」

瑞枝「うっちー……」

雅也「みずちゃんが東京に行かなかったら、このことはずっと言わないでつもりでいたの。でも、東京に行くことが決まって、今日が最後の『とんちゃん』になるんだったら、今日しか言うタイミングないと思ってさ」

瑞枝「……うっちーの気持ちは嬉しいけど……私、うっちーの期待には答えられない……」

雅也「（苦笑して）分かった、どうせそういう答えになるってことは。だって、うちの専門学校でなつ姐さんと並ぶ二大巨頭のみずちゃんだもん。俺なんか、付き合えるわけないよね。（と涙を浮かべながら）でもさ……せめて最後に、正直に俺の気持ちには伝えときたいと思って……」

瑞枝「私、自分に自信がないの。だから、うっちーみたいな素敵な人にそんなこと言わ

れて、すごく嬉しい。励みになる」

雅也「……」

瑞枝「でも、うちーとは腹を割って話せる、素敵な友達っていう関係性でいたいの。そのほうが、お互いのために一番良いと思ってる。うちーが嫌いなわけじゃないから、それだけは誤解しないでよ」

雅也「分かってる……分かってる……」

瑞枝「知らなかったな、うちーが私をそんな風に思ってくれてたなんて」

雅也「梶川とのことに未練があるかないかって聞いたのは、そういうことだったから……。もし未練があったらさ、変に俺が告白するのもおかしいと思って」

瑞枝「そっか……」

雅也「正直、俺は梶川に嫉妬したよ。あの時、梶川は漫画専攻の子と別れたばかりだった。それなのに、日も浅いうちに、すぐみずちゃんと付き合って……。だから、不謹慎だったんだけど、俺、みずちゃんが梶川

と別れた話を聞かされた時、内心喜んじや
ったの」

瑞枝「……」

雅也「ひどい男だよ……」

瑞枝「うっちーでも、そういう気持ちになる
ことあったんだ」

雅也「みずちゃんのことを好きだから、こん
な気持ちになっちゃたんだと思う」

瑞枝「……」

雅也「ごめん、何か変な雰囲気になっちゃっ
て。フラれるのは覚悟の上だった。後悔し
てない、みずちゃんにちゃんと正直に俺の
気持ち伝えれたから」

瑞枝「うっちー……」

と、駅の改札口までやってくる雅也と
瑞枝。

瑞枝「じゃあ……行くね」

雅也「みずちゃん……」

お互い涙を浮かべると、優しく抱き合
う。

雅也「三年間、ありがとう……」

瑞枝「こちらこそ……うちーと友達になれて良かった……」

雅也「みずちゃん……」

瑞枝「うちー……」

雅也「元気でね……」

瑞枝「うちーも、体にだけは気を付けてね。皆勤賞取ったうちーでも、どこで体壊すか分からないんだから」

雅也「うん……」

瑞枝「……」

雅也「……」

瑞枝「またね……」

雅也「……」

瑞枝「バイバイ」

と、改札を通って中へ入っていく――
瑞枝、振り返ると雅也に手を振る。

雅也、涙を拭くと手を振り返す――
瑞枝、優しく微笑むと、そのままホーム
の中へ消えていく。

呆然とその後ろ姿を見送る雅也。

8

駅・ホーム（夜）

待合室のベンチに座っている瑞枝――
鞆から雅也の手紙を取り出す――三年
間の中で瑞枝と映っている何枚もの写
真が印刷されている。

ぐっと涙をこらえる瑞枝――裏をめく
ると、雅也からの手紙が記されている。

雅也の声「みずちゃんへ　まずは三年間、仲
良くしてくれて、本当にありがとう。学園
祭のお化け屋敷をきっかけに仲良くなり、
そこからみずちゃんと過ごした時間は、と
ても多かったように思います。なつ姐さん
とよく一緒に帰ったし、バーベキューも行
ったし、インターンで東京に行ったときは
肉じゃがを送ったり、ポトフオリオの意
見交換をしたり、誕生日プレゼントを渡し
あったり、何度も飲みに行ったり……あげ
るとキリがないね。それに、『とんちゃん』

に連れて行ってあげれたことは、本当に良かった。あんなに上串にハマるとは思いませんでした。それと、大須にも行っただし、熱田神宮にも行っただし、思えば専門学校に
いる数多くの友達の中で、こんなにも学校内でもプライベートでも遊んだのは、みずちゃんぐらいだったんじゃないかな。それに、進路のことなど、いろんな相談にもお互いに乗りあって、いつの間にかみずちゃん
は、学校生活の中で欠かせない存在になっていました。一つひとつの思い出や出来事を思い返すと、本当に尽きないぐらい、みずちゃんと過ごした日々は計り知れない
と思います。東京に行くとき、正直ショックだったけれど、せっかく決まった進路だもんね。東京へ行っても頑張ってください。そして、卒業してからもまた仲良くしてください。必ず東京に遊びに行きます。また飲みに行こうね。みずちゃんに潰されないように、頑張ってアルコール

鍛えようと思います。書き足りないことは
たくさんあって、また思い出す出来事も多
分あるかもしれないけれど、これだけは言
っておきます。三年間、素敵な思い出をあ
りがとう。みずちゃんと出会えて、本当に
良かった。みずちゃんと過ごした日々は、
決して忘れません。また会う日まで、さよ
うなら……。名古屋芸術専門学校 シナリ
ライター専攻 木内雅也」

涙を浮かべて、ぐっと手紙を握りしめ
る瑞枝——そこへ、電車がやってくる。
瑞枝、涙を拭くと、電車の中へ入って
いく。

9 木内家・雅也の部屋（夜）

寂しい顔をして雅也が帰宅する——鞆
から瑞枝の手紙を出すと、封を開けて
読み始める。

瑞枝の声「うっちーへ 久しぶりに手紙を書
くので、上手く書ける気がしません、ごめ

んね。うちーと仲良くなったのは、学園祭のお化け屋敷だったよね、懐かしいね。あの時の印象は、すごく良い子そうだな、マロメイク似合うなでした。そこからいつの間にか、たくさん話すようになってたね。自分でもこんなに仲良くしてもらえとは思ってなかったから、ビックリしています。まさかこんなに飲みに行くまでの仲になれるとは……（笑）本当にありがたいです。この三年間、本当に色々あったけど、うちーにはとてもお世話になりました。こんなにいろんな雑談や愚痴とかいろんなことが話せた友達は、うちーぐらいしかいないんじゃないかなと思います。うちーは天然人タラシ（褒め言葉だよ）だから、つついこつちが甘えちゃうね。天然人タラシなんて、なかなか他の人には真似できないうちーの武器になると思う。たくさんある良いところの一つだから、それを活かして頑張ってくれ社長！ 儲かったら焼

肉奢ってくれ。きつとうちーは、人が良すぎて悩んだり苦しくても、自分の中でためがちだから、ちゃんと発散しなきゃダメだよ。こんなんでよかったら相談乗るから、いつでも連絡してね。とりあえず書いておきたかったのは、こんなところですよ。文章が変になってそうだけど、大目に見てください（笑）　うちーとは、これからも仲良くずっとしていきたいと思います。だから東京来たら飲みに行こうね。約束ね。これが最後にならないことを祈るので、積もる話もありますが、これで終わりにします。続きは、飲みに行ったときにでも。とりあえず、体が資本なので、体には気を付けてね。三年間、学校生活では大変お世話になりました。これからは社会人、大切な友達としてよろしくです。お互い、大変なことはあると思うけど、頑張ろうね！　また会う日まで、サヨナラ。本当に感謝しています、ありがとうございます！！　元CG・映像クリエイ

「ター専攻 福本瑞枝」

読みながら泣いている雅也——読み終わると、手紙を持つ手が震えており、そのまま顔を伏せて声押し殺して涙を流す。

N 「泣いた赤鬼の話のように、僕はみずちゃんからもらった手紙を、何度も読み返しては泣いていました。この二日後、四月一日を迎え、僕は個人事業をスタートさせ、みずちゃんは東京に旅立っていきました。怒涛の専門学校の三年間を過ごした僕たちでしたが、それぞれまた新しい生活が始まるうとしていました」

つづく